熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	我涙の記 ： 文苑
Author(s)	天山
Citation	龍南會雑誌，１１４： １６-２２
Issue date	1905-11-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5881
Right	

Kumamoto University

文苑

我涙の記

天山

一

月明るき夜なり、草に座して思長し。塵巷の叫喊ことぐく地下に消ゑ去りつ、世はたもむろ高うあかりてかなた靜寂のみ國に入りゆくとしも覺ゑし。耳にひゞく微の響もなければ、耳は眠りぬ。自ら閉ぢし眼うつらうつらゐしらぬひろぬに彷徨ひ入る。

うるはしの調やたとへば夕雲のあや、わがまみの海原に漂うがごと、ひゞきはうるはしうみ空をさまよふ。さなり。響の彩たゑず浮び出でくるはかなたの丘の上、まひるの光、森やみどり、紫ば白をいろどれる草花にゆりはへて、風はやわらぎの香をや吹くらむ。響はたゑず。わか胸の鼓動しらず〳〵高まりて何をか求むる。身たのづとのびて、廣野をかなたにさまよはむとす。ゆるされぬ命運や、足またくなへたり。たゞうるはしのしらべや、思ふにとこやはらぎのみ國や。

風ひとしきり搖落の梢を吹いて、冷けき夜の露いくつか、髪に落ちて聲ありしやあらずや。仰ぐに月明き夜也。小草ごとぐ〳〵夢路に許されつ。

人の世とこしへに星かげほの暗きやみなけれ。リューナの輝夜なゝ野の邊の草を照してむ。野の草またとこしへに綠なれ。いづれ、五尺の臭骸を抱いて汶々の濁流に漂はむさだめならば、せめてはこれらの慈懷に抱かれて、命のかぎり夜のあこがれの惠にゐひてむ。

森の夜をふと默念にさとし得て、
まみはまひるの雲にたゞよふ、
（あこがれ）

二

金星未だ沈まず、いまはの光ひくう地平をつたひてわが窓にきらめけり。虫の音かすかに森のしげみより、くさむらの露のひまより、花園の香漂ふほとりより、またわが窓をたどづれ來る。かゝるとき、人は遂に、さとを思ひ家を思ひ親を思ひはらからを思ひ友を思ふ也。

胸をきざむ悶のありどにもあらず、たゞわが心思にみつる時よ、その夜わが涙、森の流よりも流れて早く、頰をつたいてたゆるまなかりし。をのこぞとかみしめつゝのわが唇、風にほころぶはちすよりも脆うひらけて、身はたのづから悲の大海に漂へり。さばれ友よ、喜びさゞめくことの人生の半部ならば、悲哀もまた當然人生の半部たるべきに非ずや。かれに快樂ありこれにまたいかでゆかしみの潜まざらむ。徒に悲哀をくるしと謂ひてやまむは、その意義をしらざるものゝことのみ。げにわれや、かくて涙のゆかしみを味ひたる也。

まんゝたる大海原、そのそこにかぎりなう廣ごれる琴のいとすぢ。これや人の世のさまには非る

なきか。笑ふもの罵るもの、さゞめくものその凡てはたへず波の上に浮びて、風のまに〳〵輕流泛馳、たゞかなしみの人は重かり。大聖の悲むときや、其身沈み盡して水底の琴のね、さやけくその耳にひゞく。うましのしらべをこゝに得來りてこそ、彼等は浮びて人の世にしも傳へけれ。靈鷲の峯のをしへ、橄欖山ののりの聲、いづれかこれにあらざりける。凡夫の身、いかでこれにいたりうべき身ならねど、ひとり涙と悲とにもだゆる時やゝにこそ沈みゆけ。その時しもうな底のかすけき樂の音やう〳〵に耳につたひくる也。あゝなげゝばぞ、この身このとき、まことのさまには近きゆくか。そのうましらべにこそ悲哀のゆかしみは存するなれ。

わがなげきかくていかばかりゆかしかりしよ、その后金星の沈みゆく光、いくたびかわがふみよむ窓を射たりけむ。ふけゆく秋に虫の音のさびしさいやまさりつ。まして蕭々搖落の晩風鬢を吹いて聲ある夕もありしかど、われはまだその夜の涙のゆかしみを味ひて再ならず。（なみだ）

三

Retire-toi! car il est écrit: Tu adoreras le seigneur ton Dieu, et tu le serviras lui seul.

あゝ力あるかなこの語、あふれにあふれたる革命的風骨は、誦すたびごとに天の一角より來りて我眼に其きらめきを示すべう覺ゆ。月なく星なき夜なりし、ふとの病に陷りし友の枕に侍して、雲は靜けき秋雨の音をきゝ、梢にさゝやく西風のひゞき身に泌みては、たゞ何となううらさびしき秋の趣われを包みはてつとみつ。身もよもあらず悲めばや、涙潸然としてしきりなるに友が眠はまださ

めず。慰みもみむせむすべしらに、ふと空打仰ぐ時しもはからず誦し出でしは此神韻。さなり弱き涙はひとみをこそうるをせ、わがたぎる血しをわがたかぶりの骨、いかでこれに朽ち果てなむや。今の世たゞしの世ならねば、かれら、風にふきたる糊糠がらのそれともならず。自らいつはりて人の姿を假り、中に虎狼の兇慾を包む。澆季の世や。さばれ人の子が尊き靈はいづれ六合を流るゝみたまの流の、かすけゞともわかれならましを。いかで有の虚無に消え入る時あらむ。よる波きらめく濱邊の葉ずれのもの言ひよるみ山の夕ぐれ、たかき心のきらめき自らをせむる事のなからでや。されどもまよわしのかげあまりに美はしく、人の子ひたすらこれに戀ひあこがれぬ。その影一たび息吹いて心のきらめきは吹き消たれたり。世はかくて年また年、黑暗この闇をたどりて妖女が白衣にすがりゆく。たゞ革命の偉人よ、われ汝を愛す。彼はひとりさめたる也。たとへば茫々たるうなばらの深夜のやみにひとり大洋を守る燈臺の如く、夕靜けき秋のあれぬ八千草かれはて聲なき所梢西風にさわぐ、一本銀杏の如く—九天の靈光炳として夜毎にかれの胸をいれば、その血、その骨、いかでか生命なからむ。左手にたかき敎を握り、右手巨斧を民衆の頭上にふりかざして曰く、世よわれに從へさらずは血。クロンウエルや、ロベスピーアや、ルーデルや、みなこと〴〵く然りき。而して今の世や、今の世これなきは世の淸きが爲に非ず、あまりに汚れはてたるが爲也。さるにてもしたはしき哉革命的風骨、慷慨淋漓、意氣軒昂、はかなき北邙一片の煙をして意義と生命とあらしむるものはたゞこれ。

自ら壁にうつれる影を叱して『汝血と骨とあり——』過ちぬ。友が夢は破れたり。その衰へし頰の上、

さびしきほゝ笑ありき。（病友）

四

夕はうすれゆく雲の魂を東にしたひて、宵には落葉や深き白幽棲にとこやすらひ玉へるたらちをの昔の夢を西に戀ひて、その夜、眞夜の眠まどかならず。ふとさめられしひゞきのさても怪しや。したひし魂の聲には非じかし、よせくる仇の叫びにも似たらず、今宵天なる牡馬土をこひてや下り來る。さきなりしは遠きいなゝき、きけ足ぶみの音ゆるやかに、遙の空よりつたはる。近きぬ。蹄響わが胸の騷よりも急に。やがてまた過ぎゆく。またこのたび、いよゝ窓の邊にせまり來る。すさまじの嘶や、その聲また消にゆきぬ。覺にず頭をもたげて外のもをみつ。弦月光さやかなるかな。けだしこよひ秋風わが森をたづねつとしられたり。

あゝたかきかな　力あるかな、わが秋風。かれはひとり床の中にして汝が利劍を思ふ。之をうちふりつゝ秋の山を吹き、秋の野を吹き、秋の水を吹くとき、零落と寂凉とはあまねく地の上にみち〳〵て、いたりいたらぬ隈あらじ。されどもわが秋風、窓に來りてわが告ぐる所にきゝてむ。吹かば吹け、野もやせよ山もやせよ、森の木の葉をはらひ去らば、われはひまもる星の光や仰がむ。されどもはるけく、北肥の國の野に入りて、わがたらちねが鬢のほつれを吹くこと勿れ。さらでに白き鬢のほつれを吹くこと勿れ。

風に答なかりき。われはまた夢にや入りけむ。（あきかぜ）

五

秋已に老いぬ、客窓耳をそばだてゝ秋風のさゝやきをきく時、ひとへにわが故郷なるかせの堤を思ふ。秋姫の姿なほ幼かなりしころ、夕べ流るゝ雲の行方をしたひて、いくたびかしらぬまに堤の暗に包まれけむ。そのひとよ、わが家の灯火をながめつゝエドワードがSehnsuchtのうた誦してかへるさ、はじめて秋風野をつたひつとしりたりし也。

うばら夢る格子のうしろ歌聲響く、乙女子の
うましらべよ、梢には風し翼を收めたる、

黄金の光みちみてり黄花白花花咲みて
柏扁はふるふ其影の城壁に小草にゆるゝ野や、

絶ねずこそよれ其格子たねずこそきけ過ぎし日の
愛の若きにあこがれて泣いては歎く其響、

たねずこそきけ絶ねずたねず、歌の紅唇に夢みつゝ
輝高き額白う垂れたる髪を夢みつゝ、

花崗と石英の階段の上きくにやさしき足の音や

過ぐる衣ずれ茫然に秘密もの云ひよるかとも、

あこがれ生ひぬ我精靈生ひぬ戀ひぬ願事と
足音靜にゆく所みはるに額をよせな迎の、
わが「春の日」よさびしくも煙の如く消ゆもゆけ
たゞあこがれと傾聽にうばら夢みる格子によらむ　（九月三日譯）

（ともしび）

月の出

棣花

九州近海有數の難所、黑の瀨戸を横切つたのは一昨日の正午少し前であつた。

春季北国の休暇を如何にして消費すべきかと言ふ事は日比余が焦慮せし所であつた、白波寄する不知火海濱の浴館に投じて硬張れる吾が頭腦を温めんか、或は洽く名刹舊祠を訪ねて、所謂人工美の